

備中高松城三の丸跡

発掘調査概報

2000年3月

岡山市教育委員会

備中高松三の丸跡 正誤表

頁	行	誤	正
目次		第Ⅲ章 遺構と遺物 10	第Ⅲ章 遺構と遺物 15
目次		第Ⅳ章 まとめと展望 40	第Ⅳ章 まとめと展望 38
8	18	表れる	現れる
16	8	高杯	高坏
3	2	12m	10m
30	4	9.5m	7.5m
31	18	復原	復元
35	5	土坑墓	土壙墓
36		43 梢	43 碗
39	14	中近世時	中近世土器
39	29	復原	復元

序

岡山市は近年の広域合併の結果、わが国の古代社会において重要な位置をしめる吉備国の中核を占めるようになり、古墳をはじめ多種多様な遺跡が所在しており、その密度は全国有数であると思われます。これら埋蔵文化財の保護保存は現代社会の経済成長に伴う宿命的な社会問題となっており、行政課題として埋蔵文化財保護行政の中心的施策であります。

岡山市教育委員会は、都市開発が増加の一途をたどる今日の状況のなかで、埋蔵文化財の保護保存と諸処の開発との調和を図るために、この数年来各種の遺跡の発掘調査を実施しておりますが、その社会的要求の増大の一途に対して有効な行政的保存施策を苦慮しながらも、その重要性を痛感して銳意取り組んでいる次第であります。

このたび報告いたします備中高松城三の丸一画の発掘調査は、市道の改良工事に伴って記録保存を実施致したものであります。

発掘調査につきましては、発掘調査対策委員会の諸先生方のご指導と関係者各位や発掘参加者のご支援を受けて実施され、城郭遺構のほかにも弥生時代や古墳時代の住居跡などを検出いたしまして、高松地区の歴史を考える上で大変貴重な成果を上げております。

発掘調査の成果は発掘に際しての関係者皆様方のご指導とご支援の賜物であり、皆様方を始め調査担当各位に対しまして、心から謝意を表する次第であります。

この報告書にまとめました調査成果につきましては、ご検討、ご批判を頂き、少しでも岡山地方の古代史および中世史の研究に寄与できるならば幸いに存じます。

平成12年3月31日

岡山市教育委員会
教育長 戸 村 彰 孝

例　　言

1. この報告書は岡山市教育委員会文化課が平成9年6月9日から平成10年3月31日にかけて実施した市道高松14号線道路改良工事に伴う岡山市高松641-1ほかの備中高松城三の丸跡の発掘調査に関するものである。
2. この報告書の作成は岡山市教育委員会文化課が実施し、その執筆は高橋伸二が担当した。
3. 遺物の実測とトレースは高橋、山元尚子がおこない、写真撮影は高橋がおこなった。
4. この報告書に用いている高度値は標準海拔高度である。
5. この報告書に用いている方位は磁北である。
6. 図2は建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「総社東部」を複製し、加筆したものである。
7. 遺物・実測図・写真等は岡山市教育委員会にて保管している。

目 次

第Ⅰ章 位置と歴史的環境.....	1
第Ⅱ章 調査の経過.....	5
第Ⅲ章 遺構と遺物.....	10
第Ⅳ章 まとめと展望.....	40
図 版.....	1 ~10

挿入図目次

図1 備中高松城の位置	1	図33 土坑15出土遺物	21
図2 周辺遺跡分布図	2	図34 土坑19	22
図3 調査区位置	7	図35 土坑20	22
図4 発掘区域図	7	図36 土坑20出土遺物	22
図5 調査区断面図	8	図37 土坑21	22
図6 調査区剖面図	10・11	図38 土坑22	22
図7 1区遺構配置図	10・11	図39 土坑23	22
図8 2区遺構配置図	10・11	図40 土坑24	23
図9 3区遺構配置図	10・11	図41 土坑24出土遺物	23
図10 4区弥生時代・古墳時代遺構配置図	12・13	図42 土坑26	23
図11 5区弥生時代・古墳時代遺構配置図	12・13	図43 土坑27	23
図12 4区中世・近世遺構配置図	12・13	図44 土坑29	24
図13 5区中世・近世遺構配置図	12・13	図45 土坑30	24
図14 6区弥生時代・古墳時代遺構配置図	14・15	図46 土坑31	24
図15 6区中世・近世遺構配置図	14・15	図47 土坑32	24
図16 7区遺構配置図	14・15	図48 溝7	25
図17 8区中世・近世遺構配置図	14・15	図49 溝11	25
図18 土坑1・2	16	図50 溝11出土遺物	25
図19 土坑2出土遺物	16	図51 壘穴住居1	26
図20 土坑3	17	図52 壘穴住居2	26
図21 土坑3出土遺物	17	図53 壘穴住居3	26
図22 土坑5	18	図54 土坑7	27
図23 土坑5出土遺物	18	図55 土坑7出土遺物	27
図24 土坑9	19	図56 土坑28	27
図25 土坑9出土遺物	19	図57 壘穴住居4	28
図26 土坑10	19	図58 壘穴住居4出土遺物	28
図27 土坑11	20	図59 溝10	29
図28 土坑11出土遺物	20	図60 溝10出土遺物	29
図29 土坑14	21	図61 溝4	29
図30 土坑16	21	図62 溝4出土遺物	29
図31 土坑18	21	図63 溝8	30
図32 土坑15	21	図64 溝8出土遺物	30

図65 溝 9	31
図66 井戸 1	32
図67 井戸 3	32
図68 井戸 5	33
図69 井戸 7	33
図70 井戸 9	33
図71 井戸 8	34
図72 井戸 8 出土遺物	34
図73 P68	35
図74 P68出土遺物	35
図75 建物 1	35
図76 建物 2	35
図77 建物 3	36
図78 溝 3	37
図79 土壙墓 1	37
図80 井戸 6	37
図81 高松城図	40
図82 推定城郭城	40
図83 境目七城の位置	41

第 I 章 位置と歴史的環境

備中高松城は足守川左岸の沖積平野に位置する。(図2) 遺跡の所在地は現在では岡山市に編入されているものの、昭和46(1971)年の広域合併以前は吉備郡高松町である。また、高松地区は律令制下では備中国賀陽郡のうち板倉郷、生石郷と都宇郡河面郷に属している。

遺跡の所在する平野は北側から北東側にかけては標高200~300mの吉備高原が広がり、北北西から南南東に継続する足守川を挟んで南西側にも標高200m程度の丘陵が広がる。古代には主要河川であった高梁川の分流がこの平野を横切って「吉備の津」に注いでおり、この平野に所在する遺跡の多くがこの河川により形成された自然堤防である微高地に位置している。城郭が所在する微高地も北西から南東方向に向いて弓なりに形成されており、周辺部の水田の高低差から、この微高地の両側に河道が存在していた状況が観察できる。高松から吉備津にかけては自然堤防と後背湿地が交互に並ぶ平野であり、その自然堤防上に集落が継続的に形成される。

縄文時代

この沖積平野で最初に遺跡として認められるのは縄文時代からである。矢部奥田遺跡⁽¹⁾では早期の押型文土器が出土しているが集落の痕跡が確認できるのは後期からであり、後期以降は遺跡数が増加する傾向にある。南溝手遺跡⁽²⁾ではイネの初圧痕のある土器が出土したほか吉野口遺跡⁽³⁾では晩期の集落が確認されその周辺部でイネのプラントオバールが検出されており、稲作の開始時期やこの時期の生業のあり方についての問題もからめて重要なデータが提示されている。

弥生時代

弥生時代はこの平野と周辺部に飛躍的に遺跡数が増加する。足守川下流部では東山遺跡、岩倉遺跡、川入遺跡⁽⁴⁾で前期の遺構、遺物が確認されている。中期以降は吉野口遺跡、新郷貝塚⁽⁵⁾、高田遺跡、津寺遺跡⁽⁶⁾、加茂政所遺跡⁽⁷⁾、など足守川中流部で新たな遺跡が形成されはじめ、堅穴住居などが確認されている。後期になると付近では高松沼田遺跡、高松原古才遺跡⁽⁸⁾、立田遺跡⁽⁹⁾などが形成されるが、さらに津寺遺跡、高塚遺跡、矢部南向遺跡⁽¹⁰⁾、東山遺跡、上東遺跡⁽¹¹⁾など大規模な集落遺跡が出現する。この時期、周辺の丘陵部には墳丘墓が築かれ、最大のものは全長80mを測る楯築墳丘墓⁽¹²⁾をはじめ、鯉喰神社墳丘墓など大型の墳丘墓が足守川下流部の丘陵に築造される。また、北側の丘陵部には、経塚墳丘墓、浦尾5号墳、生石神社境内墳丘墓などが築かれる。



図1 備中高松城の位置



- | | | |
|------------|----------|----------|
| ①梅中高松城跡 | ⑪幸利神社遺跡 | ㉔瀧山古墳 |
| ②伊ナ界堀堤跡 | ⑫加茂遺跡 | ㉕千足古墳 |
| ③高松遺跡 | ㉓内戸口遺跡 | ㉖赤山古墳 |
| ④上道遺跡 | ㉔真城寺壇山古墳 | ㉗延喜寺跡 |
| ⑤立印遺跡 | ㉕佐古田壇山古墳 | ㉘くも山遺跡 |
| ⑥加茂取所遺跡 | ㉖小瀧山古墳 | ㉙冠山城跡 |
| ⑦三木木道跡 | ㉗大崎魔寺 | ㉚笠山城跡 |
| ⑧津寺遺跡 | ㉘上手遺跡 | ㉛南峰天神山城跡 |
| ⑨津寺(加茂小)遺跡 | ㉙三手向原遺跡 | |
| ⑩加茂城 | ㉚高屋遺跡 | |

図2 周辺遺跡分布図

古墳時代

当遺跡の南東方に位置する吉備中山山塊に中山茶臼山古墳や車山古墳など臨海性の大型前方後円墳が出現した後、古墳時代中期には小盛山古墳、佐古田堂山古墳、小造山古墳、など大型の前方後円墳や円墳が内陸部にも築かれるようになり、そのうち最大のものは全長350mに達する造山古墳であり、286mの作山古墳なども出現する。これらの巨大古墳については吉備の大首長という神にとどまらず大王を被葬者とするとの指摘がある⁽¹³⁾。

古墳時代後期には津寺遺跡で大規模な集落が引き続き形成されるほか、千引遺跡⁽¹⁴⁾では製鉄遺構が確認され、吉野口遺跡や窪木薬師遺跡でも鍛冶炉が確認されている。またこの時期三井谷古墳群、大崎古墳群、王墓山古墳群⁽¹⁵⁾など周辺の丘陵部に群集墳が形成される。特に大崎古墳群については、群集墳のなかでの盟主的古墳が継続的に営まれ、終末期をへて大崎庵寺の建立へと続く有機的な継続関係が想定されている⁽¹⁶⁾。

古代

調査地点の北西山裾には飛鳥時代に創建された可能性の指摘される大崎庵寺があり、特異な形態である「水切り瓦」が出土している。また、官衙関連の遺跡として津寺遺跡、川入遺跡などがあり、津寺遺跡では堀立柱建物を問む溝が確認されており、矢部庵寺は山陽道の駅家に比定されている。また塔心礎のみを残す惣爪庵寺を都衙付隨の寺とする指摘もある⁽¹⁷⁾。また、高松城跡の周囲の水田区画には条理地割りを残していると推定される箇所も見受けられる。また、足守庄をはじめ、生石庄、大井庄など足守川左岸部は莊園化される傾向にあるが、右岸部は阿倉郷、服部郷などの国領で占められる傾向が『服部郷圖』『足守庄莊園絵図』などからうかがえる。

中世

古代末から中世にかけての集落遺跡のうち、津寺遺跡、三手向原遺跡⁽¹⁸⁾では溝で区画された建物が検出されている。また、吉備津神社の南西方に位置する伝賀陽氏館跡は方形の環濠を巡らす中世の居館跡であり、吉野口遺跡や三手遺跡⁽¹⁹⁾、加茂政所遺跡などでも中世の集落が検出されている。さらにこの地域にあって中世の代表的莊園遺跡である足守庄莊城におけるこれまでの調査で、中世の寺院跡なども確認されている⁽²⁰⁾。

城郭関連遺跡

備中は戦国大名の出現を見なかった地域である。備中の守護大名細川勝久は守護代莊元資の反乱以降、急速に勢力が衰え、国人領主である庄氏、三村氏、石川氏、新見氏、多治部氏などが台頭する。これらの国人層は毛利氏や尼子氏などとの結びつきによって勢力を伸張させていったが、備前での宇喜多氏の成長と毛利氏と織田氏との対立によって軍事的な緊張関係が拡大することとなり、いわゆる「中国の役」によって衝突するのである。

備中高松城は天正初年頃に三村氏の家臣である石川久式によって築城された。しかし、久式の主人である有力国人の三村元親が毛利氏へ反抗したことによる「備中兵乱」によって元親と久式が滅んだ後は、それまで石川氏の家臣であった清水宗治が城主となった。

「中国の役」で毛利方の最前線となつたのが備前・備中の国境地帯であり、国境防備の城として、

庭瀬城、松島城、日幡城、加茂城、冠山城、宮路山城などいわゆる境日の七城がある。高松城はそれら前線の城郭の結節点にあたる位置をしめている。また高松城の周辺には織田方と毛利方双方の遺構が残されている。城の南東には水攻め築堤後が遺存し国指定史跡となっている。高松福橋の北背後にある竜王山には山頂部付近に長大な土塁が遺存しており織田方の陣地跡と推定される。また土塁はほかに八幡山の宇喜多陣地跡や造山古墳後円部などの遺存する。鼓山には羽柴秀長の陣所跡があり、土壤の跡が明瞭に遺存する。また冠山近くのすくも山では城郭遺構が確認され「すくもつかの城」に比定されている⁽²¹⁾。また、城の南方、日差山丘陵には小早川氏の陣地とされる鷹の巣城、甫崎天神山城⁽²²⁾がある。

落城後はこの城は宇喜多氏の領するところとなり、さらに宇喜多氏が閑ヶ原の合戦で失脚した後は徳川氏の旗本花房氏の領地となったが、ほどなく花房氏が陣屋を移したため城は廃城となった。

- (1) 高畠知功ほか『矢部奥田遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82 1993
- (2) 平井泰男『南漢手遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 1995
- (3) 草原孝典『古野口遺跡』1997
- (4) 正岡陸夫『川入遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2 1974
- (5) 近藤義郎『備中新郷貝塚』『古代学研究』8 1953
- (6) 大橋雅也ほか『津寺遺跡』2『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98 1993
龜山行雄ほか『津寺遺跡』3『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104 1996
龜山行雄ほか『津寺遺跡』4『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116 1997
高畠知功ほか『津寺遺跡』5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 1999
- (7) 松本和男ほか『加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138 1999
- (8) 前掲書
- (9) 前掲書
- (10) 江見正巳ほか『矢部南向遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 1996
- (11) 伊藤晃ほか『上東遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2 1974
- (12) 近藤義郎『橋築弥生墳丘墓の研究』橋築刊行会 1992
- (13) 出宮徳尚『造山古墳被者考(巻) - その系譜の検討 - 』『日本古代の国家と村落』 増書房 1998
- (14) 武田恭彰『千引遺跡』『奥坂遺跡群』1999
- (15) 間壁忠彦ほか『玉墓山遺跡群』『倉敷考古館研究集報』10 1974
- (16) 小郷利幸ほか『岡山市足守地域史研究』(2)『古代吉備』第16集 1994
- (17) 註 3
- (18) 草原孝典『三手向原遺跡』『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1994年度 1996
- (19) 出宮徳尚ほか『三手(庄内)幼稚園 遺跡発掘調査報告』1981
- (20) 出宮徳尚ほか『足守庄圧遺構緊急発掘調査・延寿寺跡第二次発掘調査概報』1979
- (21) 草原孝典『すくも山遺跡発掘調査報告』1998
- (22) 宇垣匡雅ほか『甫崎天神山遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 1994

第Ⅱ章 調査の経過

備中高松城跡は足守川右岸に開けた高松平野に形成された微高地上に位置する戦国時代末期の平城である。今回の調査区は城郭域の南端部に位置し、伝三の丸跡や家中屋敷曲輪あるいは堀の存在などが予測されたほか、以前から城郭域で弥生土器などが採集されており、弥生時代の集落の存在も予想された。

高松城公園への進入路である市道高松14号線の改良計画が岡山市高松支所によって計画された。当該地は周知の遺跡である高松城跡が含まれているため、高松支所長より岡山市教育委員会文化課長に対し埋蔵文化財等の存在状況確認調査依頼がなされた。この依頼を受けた文化課は用地の大半が城郭域に含まれており計画の実施にあたっては文化財保護法の適用を受けること。また城郭域については未確定な部分もあることから、調査範囲を確定するために試掘の必要性を指示した。平成8年11月18日文化課職員の立会に基づいて試掘を実施し、その結果道路予定地の東端部は埋蔵文化財の存在は確認されなかったもののその他の地点では包含層を確認するにいたった。このため文化課は平成11年11月21日付けで道路工事に先立って記録保存による事前の行政的措置が必要な旨の試掘調査の回答を高松支所に通知し、その実施に対する両者の連絡、協議を要請した。文化課と高松支所で協議を重ねた結果、記録保存を平成9年度中に実施することで合意に達した。

発掘調査の着手に先立ち、平成9年6月4日付けで岡山市教育委員会教育長から文化府長官宛に文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘通知」が提出された。

以上の経緯の基に、備中高松城三の丸跡の発掘調査は平成9年6月9日から平成10年3月31日にかけて実施された。

発掘調査組織

発掘調査主体者	岡山市教育委員会教育長 戸村彰孝
発掘調査対策委員	稻田孝司（岡山大学教授） 狩野 久（岡山大学教授） 西川 宏（岡山大学講師） 間壁忠彦（倉敷考古館館長） 水内昌康（岡山市文化財保護審議会会長）
発掘調査担当者	富岡博司（岡山市教育委員会文化課長） 出宮徳尚（岡山市教育委員会文化財専門監） 根本 修（岡山市教育委員会文化課課長補佐） 神谷正義（岡山市教育委員会文化課主査） (調査員) 高橋伸二（岡山市教育委員会文化課文化財保護主事） (調査員) 河田健司（岡山市教育委員会文化課文化財保護主事） (経理) 羅久井和恵（岡山市教育委員会文化課主事）

第Ⅱ章 調査の経過

発掘調査現場作業員 秋山孝一

板野輝男

杉原牧太郎

坪井伯美

坪井美智子

則武福一

福永富貴子

藤田順一

牧野須美子

三垣ひさえ

渡辺 勇

発掘調査現場事務員 戸田美枝子

調査にあたっては、対策委員の先生方や高松地区的文化財モニター林信男氏、三垣英二氏、地元考古学研究者のご教示と助言をいただいた。

また、現場での土木管理については綱長和建設の多大な助力を得た。

発掘調査の実施から報告書の作成にあたっては以下の方々および団体から助言と協力を得た記して感謝する次第である。

池田晶一氏、岡鶴隆司氏、加原耕作氏、葛原克人氏、河本清氏、額田雅裕氏、弘田和司氏、

的場勇氏、高松城址保興会

経過と概要

調査区は備中高松城の南端部に位置する。(図3) この城は天正初年頃に三村氏の家臣である石川久式によって築城されたが、石川氏が三村とともに滅んだ後はそれまで石川氏の家臣であった清水宗



図3 調査区位置

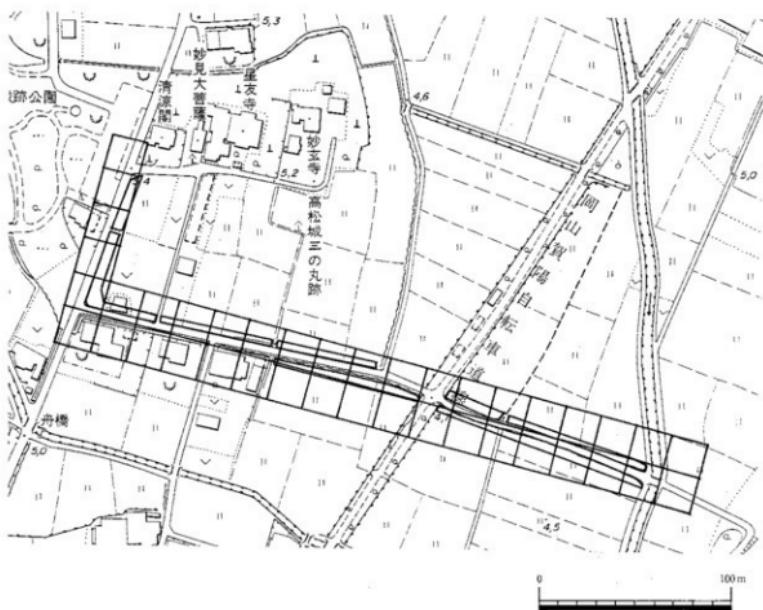


図4 発掘区域図

治が城主となった。さらに落城後はこの城は宇喜多氏の領するところとなり、さらに宇喜多氏が関ヶ原の合戦で失脚した後は徳川氏の旗本花房氏の領地となったが、ほどなく花房氏が陣屋を高松原古町へ移したため城は廃城となった。廃城後は三の丸跡の一部が寺院になつたものの大半は地下げが行われ耕地化された。なお、調査面積は1200m²である。

1区と3区は低地部にあ

たり現状でも湿地が広がり、旧河道の影響と推定される湿地状の堆積が確認された。この湿地は城郭東方の堀として利用されたものと推定される。2区と7区は微高地端部にあたり、4区、5区、6区、8区は微高地に位置し、厚さ15~20cmの水田耕土を除去すると基盤層が表れる。基盤層は黄色橙色微砂でこの面で近世、中世、古墳時代、弥生時代の遺構が確認された。

近世の遺構は、溝、井戸、墓、ごみ穴などが検出された。中世の遺構の年代は築城以前と以後に大別されるが城郭関連の遺構として多数の柱穴と堀、溝、井戸などが検出されたまた、築城以前の柱穴や井戸なども検出された。

古墳時代の遺構は土坑と竪穴住居が検出された。

弥生時代の遺構は、中期と後期の2時期があり土坑と竪穴住居が確認されたが遺物、遺構ともに中期の方が多い。

発掘日誌（抄）

6月9日	発掘開始	1区掘り下げ
23日	2区調査開始	
30日	3区調査開始	
7月11日	4区調査開始	
18日	対策委員会	
25日	1区、2区3区調査終了	
8月5日	5区調査開始	
10月27日	6区調査開始	
12月2日	対策委員会	
14日	現地説明会	
1月20日	4区、5区調査終了	
1月21日	7区 調査開始	
1月25日	8区調査開始	
2月26日	対策委員会	
3月31日	調査終了	

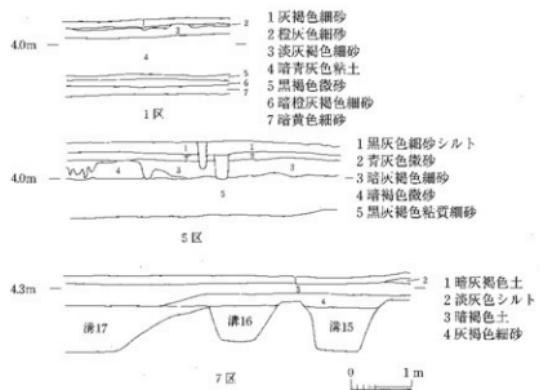


図5 調査区断面

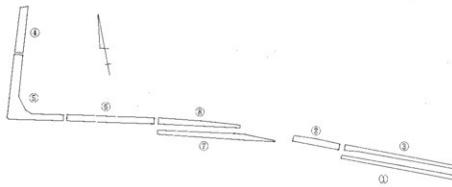


図6 調査区割図

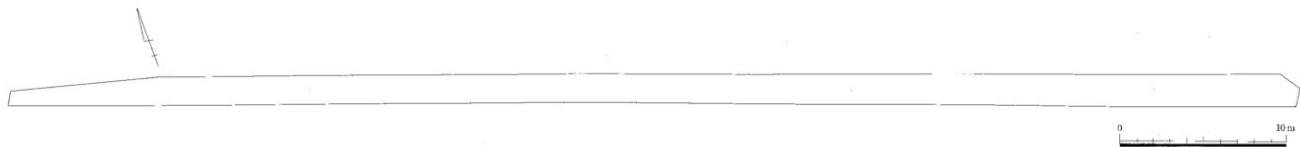


図7 1区造構配置図

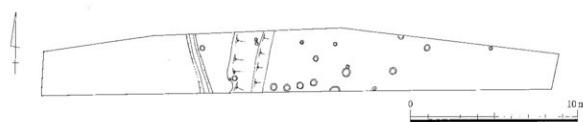


図8 2区造構配置図

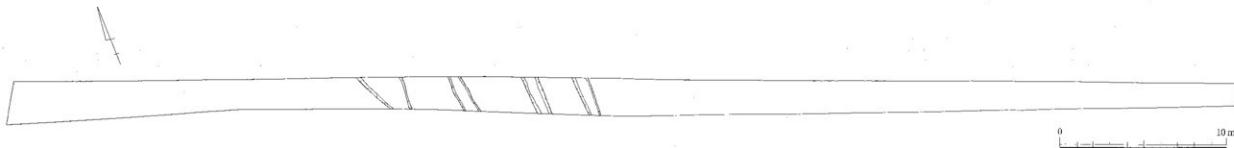


図9 3区造構配置図

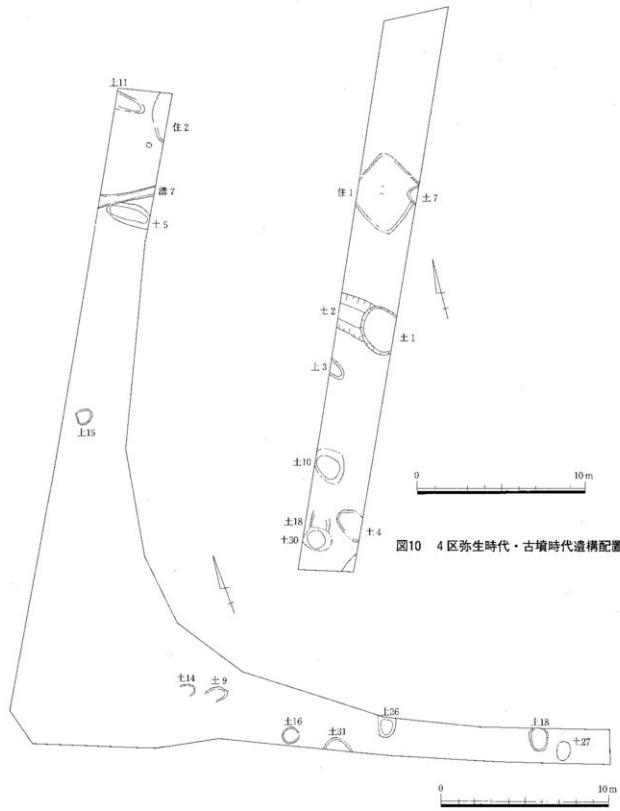


図10 4区弥生時代・古墳時代遺構配置図

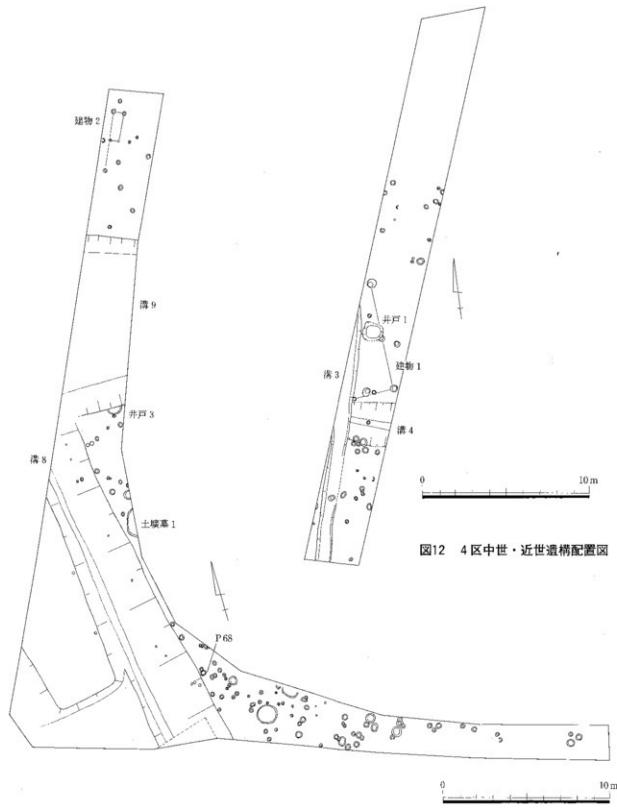


図12 4区中世・近世遺構配置図

図11 5区弥生時代・古墳時代遺構配置図

図13 5区中世・近世遺構配置図

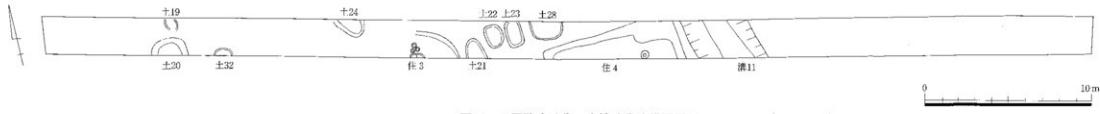


図14 6区弥生時代・古墳時代遺構配置図

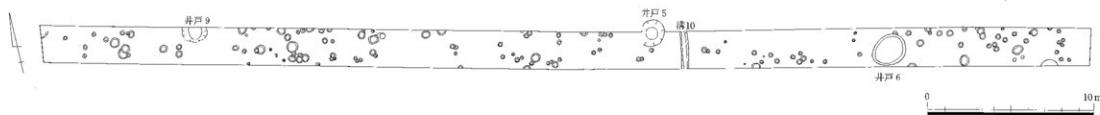


図15 6区中世・近世遺構配置図

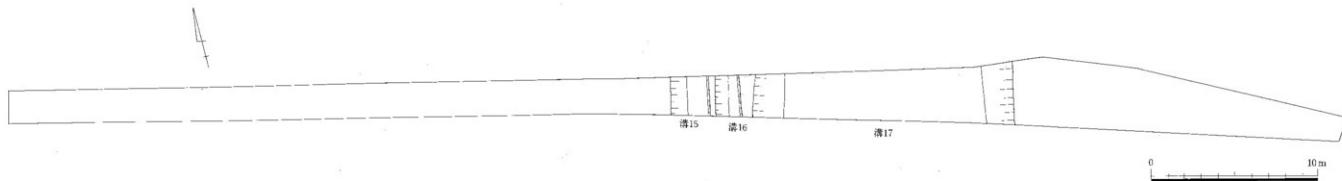


図16 7区遺構配置図

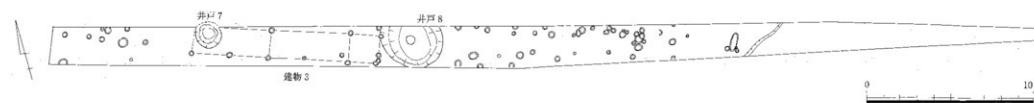


図17 8区中世・近世遺構配置図

第Ⅲ章 遺構と遺物

弥生時代 (図10、11、14)

弥生時代の遺構は4区、5区、6区の各調査区で確認された。検出された遺構は土坑と竪穴住居、溝などである。時期は中期と後期に大別されるが、遺構、遺物ともに中期の方が多い。

土坑1 (図18)

長軸2.5mの梢円形を呈する。深さは検出面から70cm、断面は逆台形を呈する。遺物は土器細片を探集したのみであるが、弥生時代後期であろう。

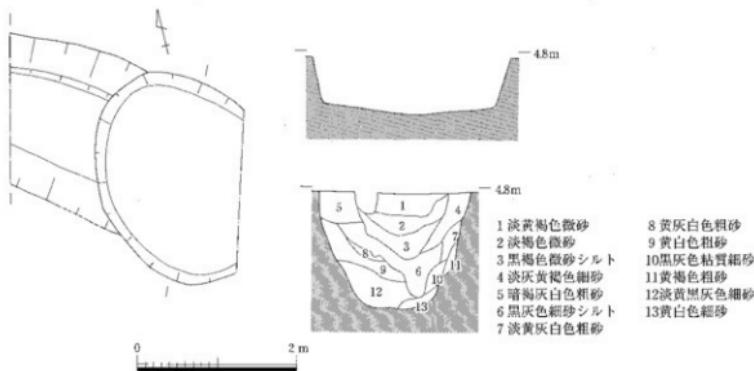


図18 土坑1・土坑2

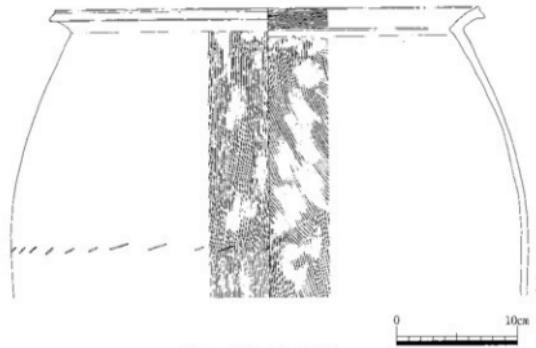


図19 土坑2出土遺物

土坑2 (図18、19)

南北2.1m、西側は調査区限界で、東側は土坑1に切られる。検出面からの深さは1.5mを測る。本来は長方形を呈すると思われる。時期は弥生時代中期であろう。

土坑3 (図20、21)

短軸が1.2mで楕円形を呈すると推察されるが、西側が調査区外に出るため全形は不明である。埋土から甕、壺、高杯、鉢が出土した。時期は弥生時代後期であろう。

土坑5 (図22、23)

短軸1.2m、長軸2.5m以上の長楕円形を呈し、検出面からの深さは65cmで断面は逆台形を呈する。甕、鉢のはかサヌカイト製の石包丁が出土した。

土坑9 (図24、25)

西半分が中世の溝によって削平を受けているため平面形は判然としないが、長軸1.8m以上、短軸1.6mで検出面からの深さ38cm、断面形は緩やかな逆台形を呈する。壺(14)が検出された。時期は

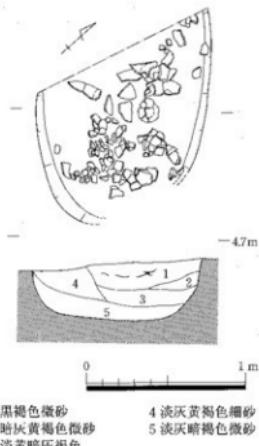


図20 土坑3

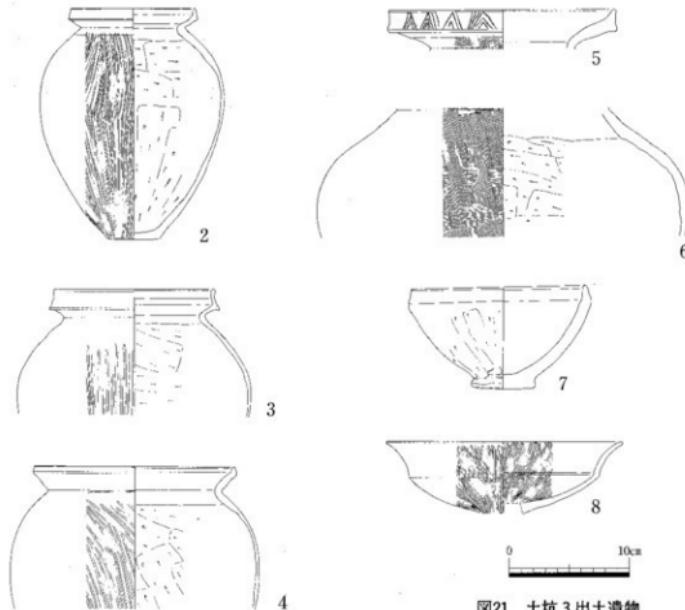


図21 土坑3出土遺物

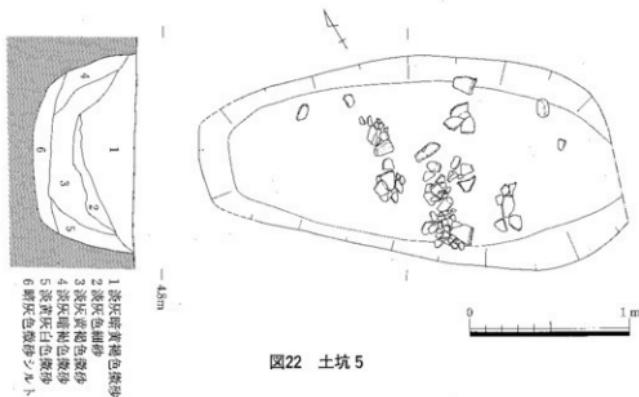


図22 土坑5

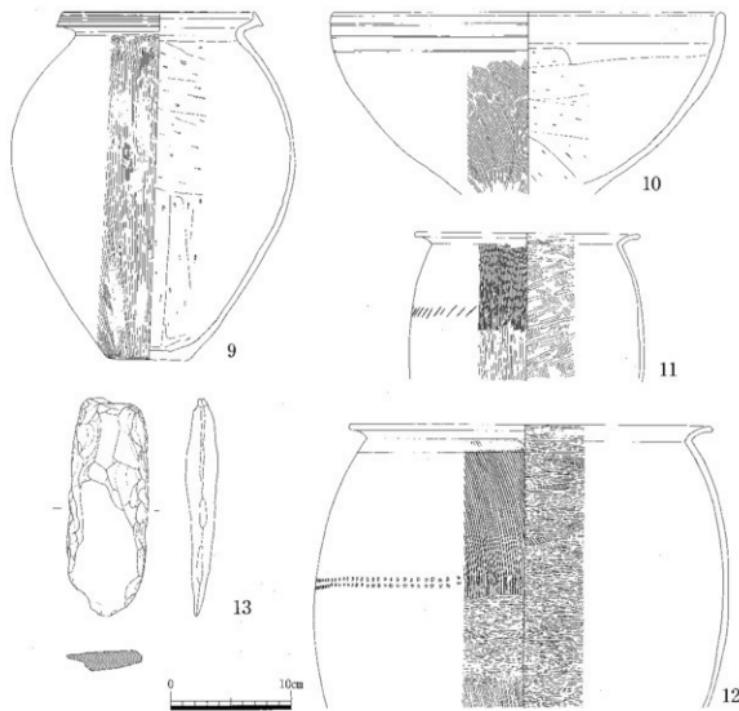


図23 土坑5出土遺物

弥生時代中期であろう。



図24 土坑9

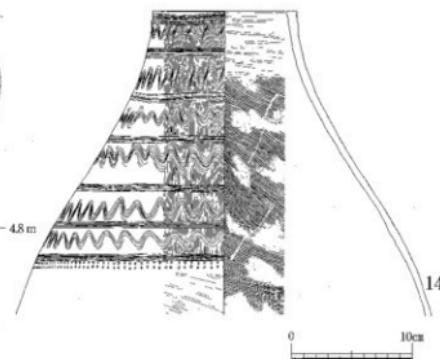


図25 土坑9出土遺物

土坑10（図26）

長軸1.8m、短軸1.25m平面は長楕円形を呈し、検出面からの深さ58cmで、断面形は逆台形を呈する。

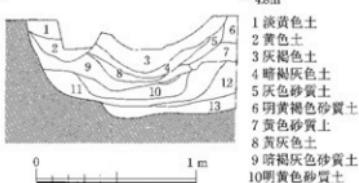
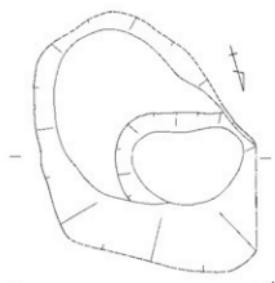


図26 土坑10

土坑11（図27、28）

長軸1.7m以上、短軸92cmで平面形は長楕円形を呈す。検出面からの深さは60cmで断面形は逆台形である。壺（15、16、17）壺（18、19）が出土した。時期は弥生時代中期であろう。

土坑14（図29）

西半分が中世の溝によって削平を受ける。長軸80cm以上、短軸65cm以上で平面形は長楕円形を呈するものと推定され、検出面からの深さ30cmで断面形は逆台形である。

土坑16（図30）

長軸90cm以上、短軸87cmで平面形は隅丸方形で、検出面からの深さは25cmで、断面形は逆台形である。

土坑18（図31）

長軸1m以上、短軸1m。断面形はU字形

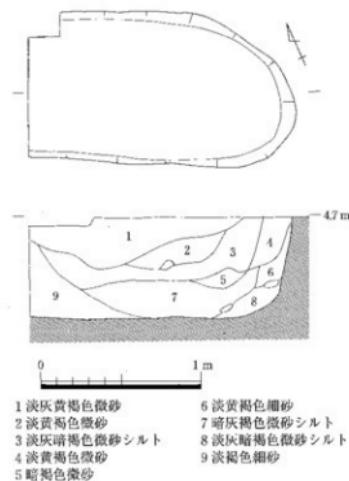


図27 土坑11

を呈するが両端部と中央部が削平をうけ平面形は不明である。

土坑15(図32、33)

かなりの部分が中世の溝によって削平を受けるが、長軸1.58m以上、短軸1.6mの長楕円形の平面形を呈すると推定される。検出面からの深さ約1mで断面形は逆台形を呈する。

土坑19(図34)

長軸1m、短軸40cm以上で平面形は長楕円形を呈すると推定されるが両端部が削平をうける。

土坑20(図35、36)

南半部が調査区外にのびるが、現状で長軸約2m、短軸95cm以上で平面形は隅丸方形を呈すると推定される。検出面からの深さ約60cmで断面形は逆台形を

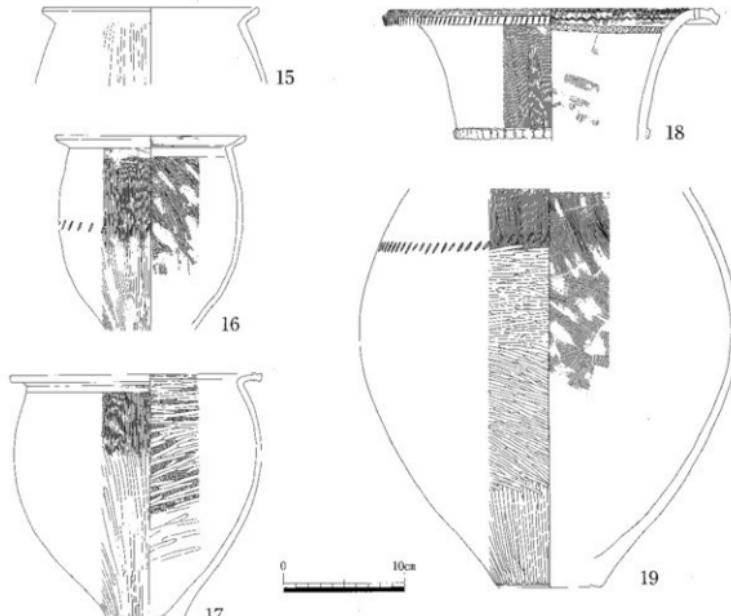


図28 土坑11出土遺物

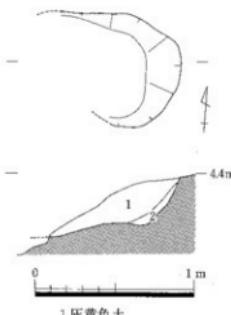


図29 土坑14

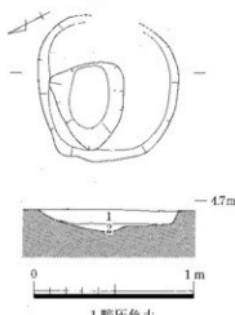


図30 土坑16

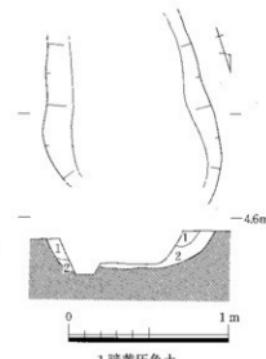


図31 土坑18

呈する。刃部が欠損した蛤刃石斧が出土した。

土坑21(図37)

長軸1.3m以上、短軸96cmで平面形は隅丸方形を呈すると推定される。

土坑22(図38)

長軸1.22m、短軸95cmで平面形は隅丸方形を呈する。
検出面からの深さは32cmで断面形は逆台形である。

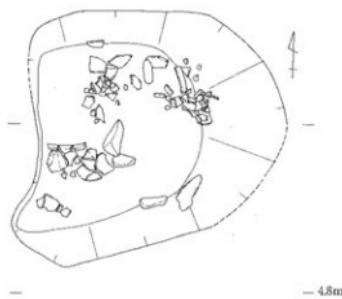


図32 土坑15

- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 黄褐色砂質土
- 4 明褐色砂質土
- 5 灰色沙泥混り粘質土
- 6 灰褐色砂泥混り粘質土
- 7 暗灰色粘質土
- 8 茶褐色粘質土
- 9 灰色微砂泥混り粘質土

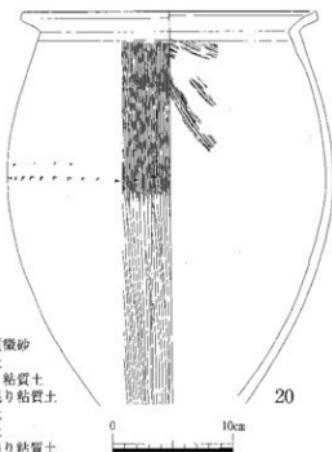


図33 土坑15出土遺物

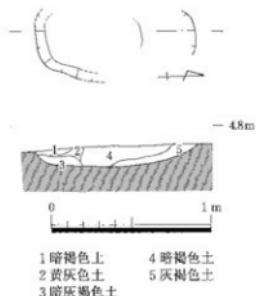


図34 土坑19

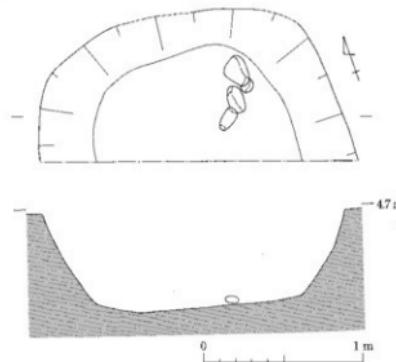


図35 土坑20

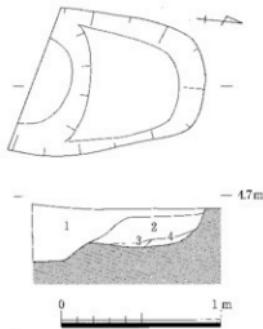


図37 土坑21

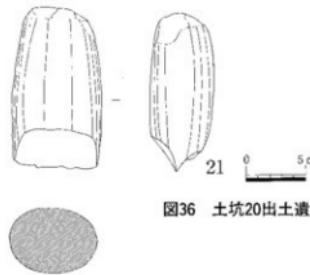


図36 土坑20出土遺物

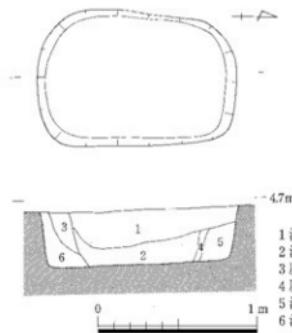


図38 土坑22

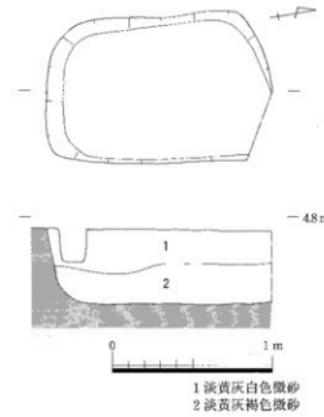
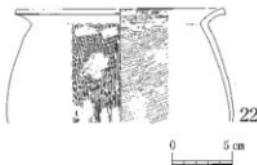
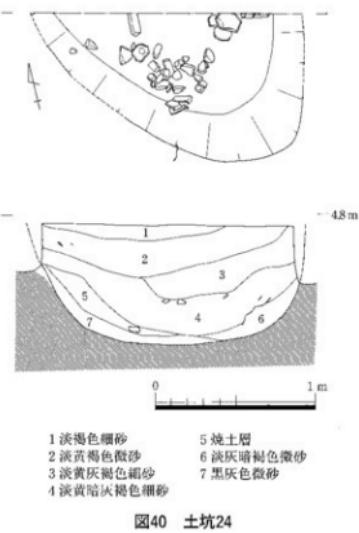


図39 土坑23



土坑23（図39）

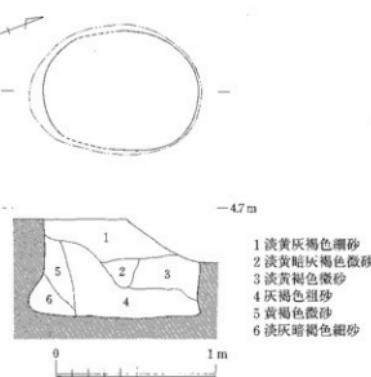
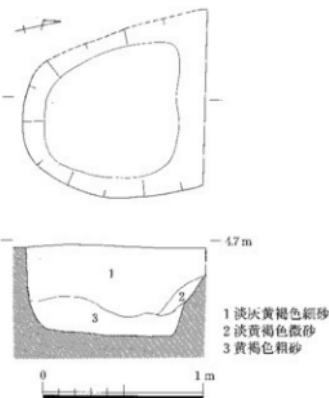
長軸1.41m、短軸92cmで平面形は隅丸方形を呈する。検出面からの深さは46cmで断面形は逆台形を呈する。

土坑24（図40、41）

長軸1.5m以上、短軸1.4m以上で平面形は長楕円形を呈すると推定される。検出面からの深さは73cmで断面形はU字形を呈する。埋土から壺が出土した。時期は弥生時代中期であろう。

土坑26（図42）

長軸1.1m以上、短軸1.06mで平面形は長楕円形を呈する。検出面からの深さは54cmで断面形は逆台形を呈する。



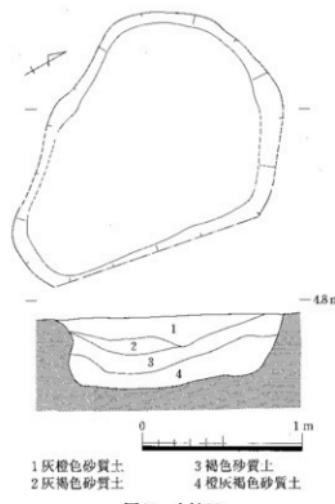


図44 土坑29

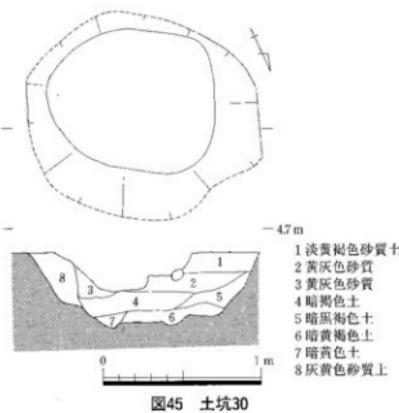


図45 土坑30

土坑27（図43）

長軸98cm、短軸75cmで平面形は橢円形を呈する。検

出面からの深さは58cmで床面は長軸
1.1m、短軸82cmで断面形は袋状を呈
する。

土坑29（図44）

長軸1.92m、短軸1.47mで平面形は
隅丸方形を呈する。検出面からの深さ
は44cmで断面形は逆台形である。

土坑30（図45）

長軸1.42m以上、短軸1.25m程度と推定されるが、
両端が削平を受けているため平面形は判然としな
い。検出面からの深さは42cmで断面形は逆台形を呈
する。

土坑31（図46）

長軸1.5m、短軸78cm以上で平面形は橢円
形と推定されるが、ほぼ半分が調査区外に出

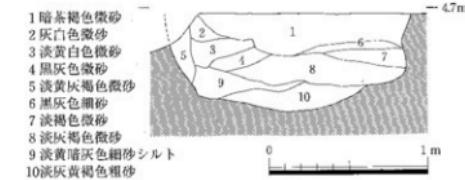


図46 土坑31

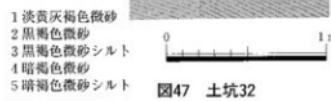


図47 土坑32

る。検出面からの深さは約60cmで断面形は逆台形を呈する。

土坑32(図47)

長軸1.07mを測り平面形は長梢円形と推定されるが水道管理設による掘削をうけており、さらに南半部が調査区外に出るため詳細は不明である。検出面からの深さは52cmで断面形は逆台形を呈する。

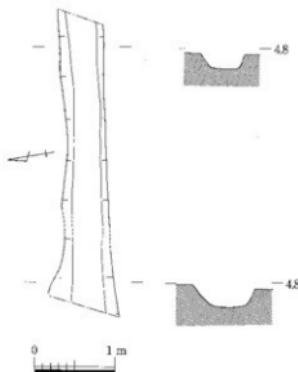


図48 溝7

溝7(図48)

東西方向に流れる小溝で幅は30から40cmを測るが両端は調査区外に出る。検出面からの深さは8cmから12cmで西側がやや低くなる。出土した土器は細片のみであるが弥生時代後期であろう。

溝11(図49、50)

幅3.35m、検出面からの深さ1.6mで南北方向に流れる溝と推定されるが両端が調査区外に出る。時期は弥生時代中期であろう。

豊穴住居1(図51)

平面形は一辺約3.3m程度の正方形と推定されるが、大きく削平を受けたうえに、四隅が切られる。中央部に径約40cm程度の炉が設けられているが水田暗渠によって両端が切られる。本来は四本柱であ

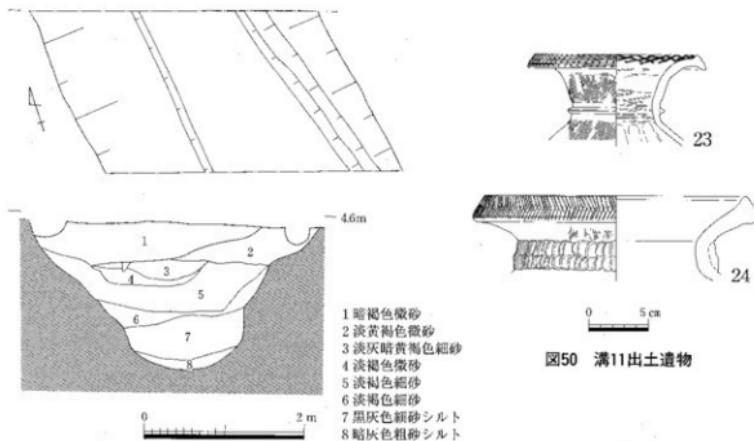


図49 溝11

図50 溝11出土遺物

ったと推定される。時期は弥生時代後期であろう。

竪穴住居2(図52)

大半が調査区外に出るため全形は不明であるが、平面形は径4m以上の円形であると推定される。検出面からの深さは15から20cmで南側で深さ10cmの壁帶溝が検出された。

竪穴住居3(図53)

平面形は円形と推定されるが、西側は攤乱坑によって削られ、南側は調査区外に出るため詳細は不明である。床面まで削平を受けているが壁帶溝、柱穴、中央ピットを検出した。

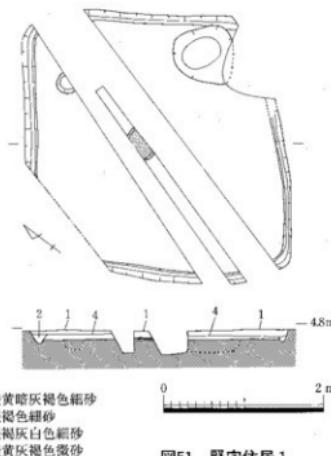


図51 竪穴住居1

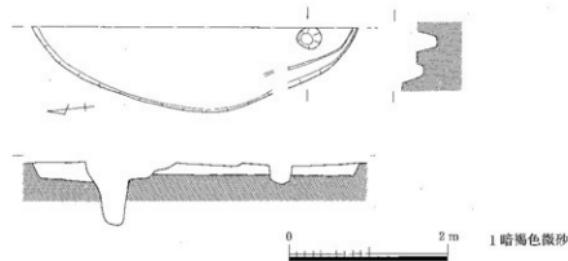


図52 竪穴住居2

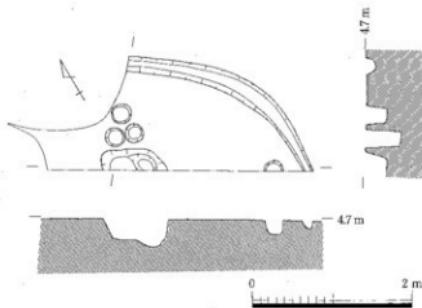


図53 竪穴住居3

古墳時代

古墳時代の遺構は4区と6区で、土坑2基と竪穴住居1棟を検出したのみである。

土坑7（図54、55）

平面形は隅丸方形と推察されるが、南東側が調査区外に出るため詳細は不明である。検出面からの深さは25cmで断面形は逆台形を呈する。小型丸底壺が1個体のみ出土した。

土坑28（図56）

北側の半分程度が調査区外に出るが長軸1.7m、短軸1.1m以上で平面形は隅丸方形を呈すると推察される。検出面からの深さは67cmで断面形は袋状を呈する。

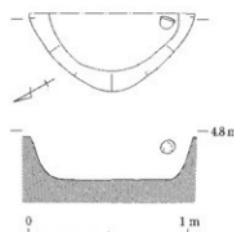


図54 土坑7

竪穴住居4（図57、58）

東西7mの方形であるが、大半が調査区外に出るため全形は不明である。検出面からの深さは50cmで、北東部に凹部がある。壁部には幅20から30cm、床面からの深さ8から10cmの壁帶溝が検出された。柱穴は1つが確認されたのみであるが、径約42cm、床面からの深さ45cmで径約15cmの柱痕跡が認められた。

遺物は北東部の埋土から壺および高坏が出土した。時期は古墳時代前期であろう。

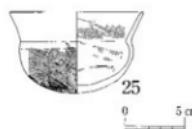


図55 土坑7出土遺物

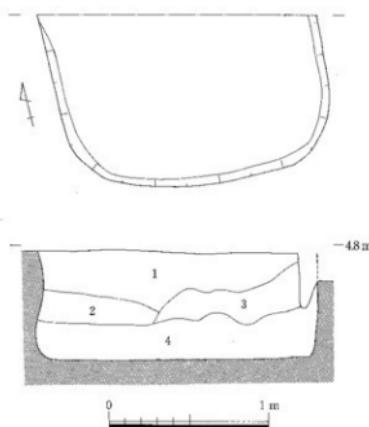


図56 土坑28

- 1 淡黄灰褐色微砂
- 2 淡黄色細砂
- 3 淡灰黃褐色微砂
- 4 暗褐色微砂

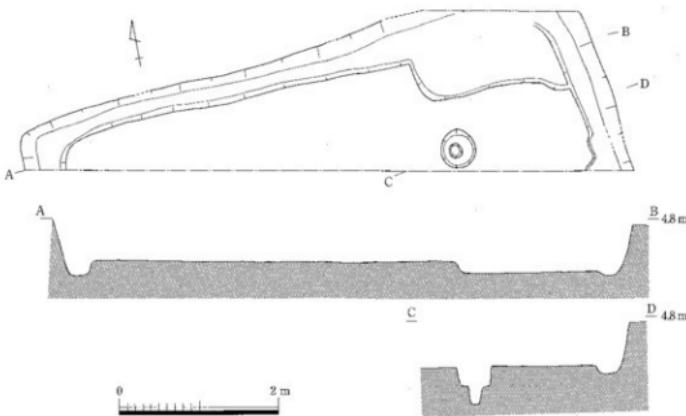


図57 竪穴住居4

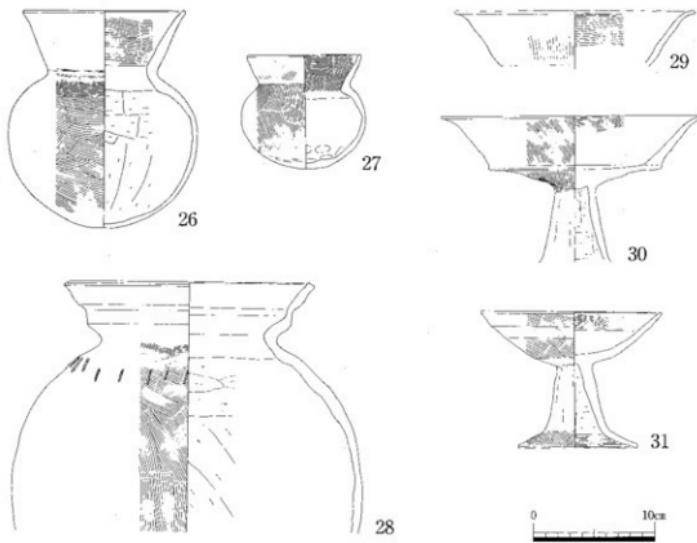


図58 竪穴住居4出土遺物

中世・近世

溝10(図59、60)

南北方向に流れる小溝で、幅約80cm、深さ16cmであるが両端部が調査区外に出るため詳細は不明である。遺物は備前焼の窯口縁が出土した。

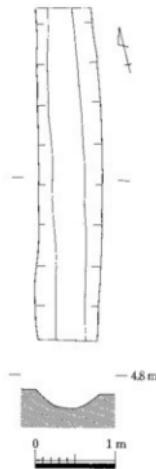


図59 溝10

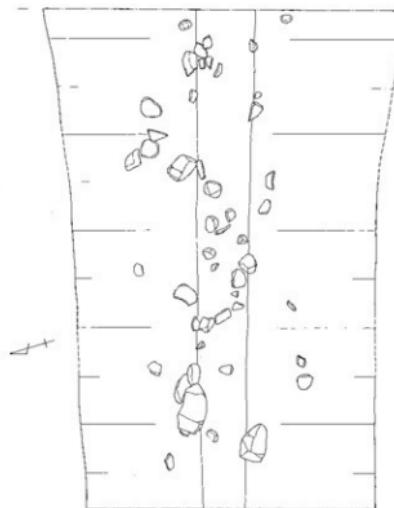


図60 溝10出土遺物

- 1 茶褐色繊砂
- 2 灰褐色繊砂
- 3 黒灰色繊砂

- 4 淡灰色繊砂
- 5 黒灰色シルト
- 6 薄灰色微砂シルト

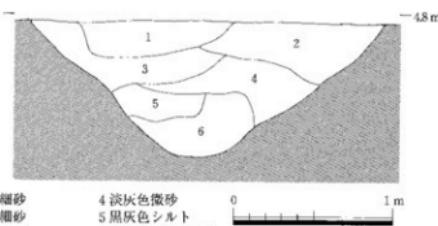


図61 溝4



図62 溝4出土遺物

溝4(図61、62)

東西方向に流れる溝であるが、両端が調査区外に出るため全形は不明である。幅1.8から2.2m、検出面からの深さは約85cmで断面形は逆三角形を呈する。遺物は擂鉢、天目茶碗片等が出土した。

溝8(図63、64)

5区の南西端部に位置し、両端は調査区外に出るが、幅約4m、深さ約2mで断面はV字形を呈する。溝の西側には段を削りだし、さらにその南側を1段低く削平する。城の外周を巡る堀であると考えられ、開削時期は不明確ながら出土遺物の年代から江戸時代初期に埋められたものと思われる。

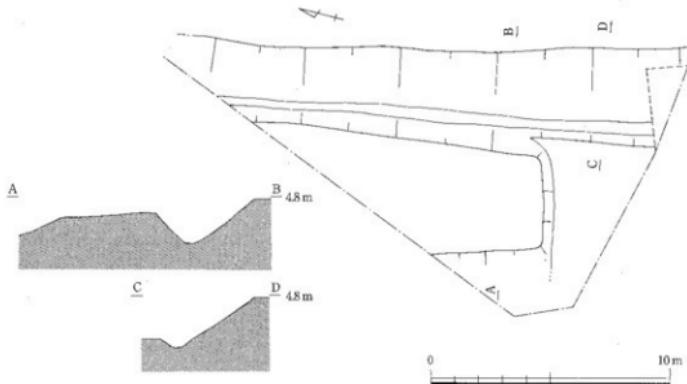


図63 溝8

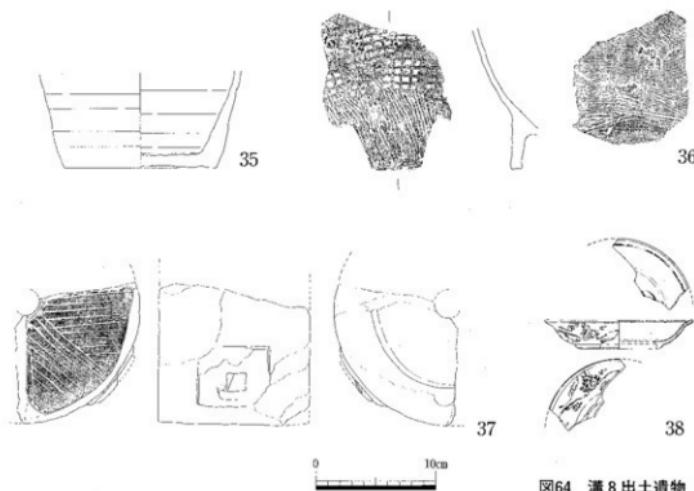


図64 溝8出土遺物

溝9 (図65)

溝8の北側に位置し、幅約12m、検出面からの深さは約1.2mで溝の底部から壠状の造構が検出された。

壠状造構の幅は約9.5m、建築部材から転用されたものが多く使用されており、南北方向には竹が渡されている。本来は直立していた可能性もあるが、部材はすべて西側から東側に傾斜する。

溝8と同様に江戸時代初期に埋められたものと推察されるが、両者の接合関係は不明である。

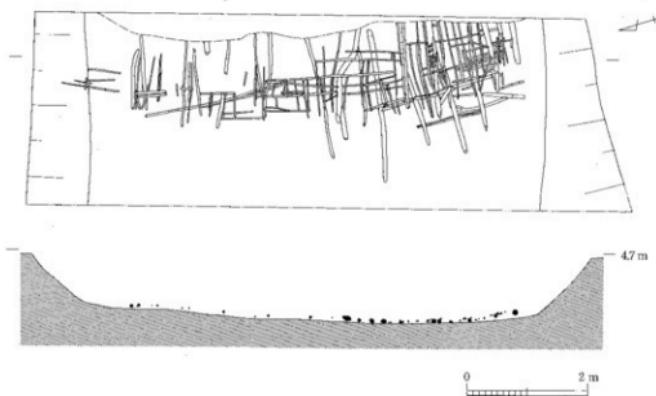


図65 溝9

井戸1 (図66)

掘り方の平面形は長軸1.1m、短軸1mの隅丸方形で40cm程度掘られ、そこから下は長軸78cm、短軸70cmの梢円形に掘られた素掘り井戸で、検出面からの深さは1.58mである。遺物は検出されなかつたが中世に属すると推定される。

井戸3 (図67)

径約85cmの円形で壁面の傾斜は急で底は平坦である。検出面からの深さは1.46mを測るが北半は溝9によって削平を受ける。遺物は検出されなかつたが中世に属すると推定される。

井戸5 (図68)

平面形は長軸1.38m、短軸約1mの梢円形で、西側は攪乱坑によって掘削を受ける。検出面からの深さは1.2m以上を測る素掘り井戸であるが崩落のため底の確認を断念した。

井戸7 (図69)

平面形は約1.3mの円形を呈する。検出面からの深さ10cm程度のところで壁面の傾斜が急になる。検出面からの深さは約1.2mで底は平坦である。中世に属すると推定される。

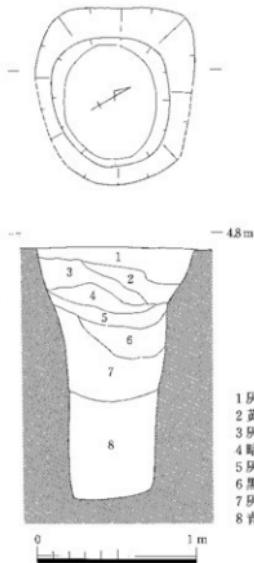


図66 井戸1

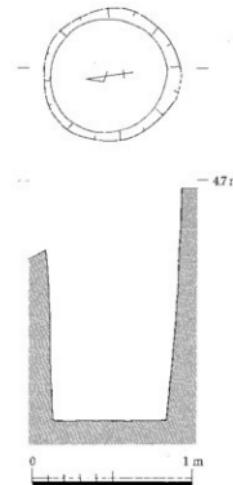


図67 井戸3

井戸9 (図70)

平面形は長軸約1.4mの楕円形を呈すると推察されるが、北半が調査区外に出るため全形は不明である。検出面からの深さは1.52mを測り、掘り方の下半は傾斜が急で底面は平坦である。

井戸8 (図71、72)

平面形は径5mの円形であるが、北側は調査区外に出る。検出面から約1.6mまで掘り下げ、さらにそこから曲物を2段に掘れる。検出面からの深さは約2.4mである。

遺物は青磁碗と底部に糸切り痕のある土師質の小皿、早島式あるいは吉備系土師器碗と呼ばれる碗などが出土した。

建物跡

柱穴の多くが14世紀代以降から廃城となる時期までのものとみられ、多数検出されたものの、調査範囲がきわめて限定されているためその復原は容易ではない。

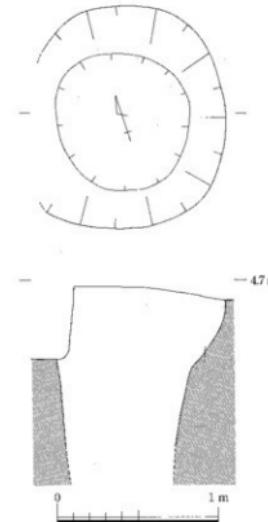


図68 井戸5

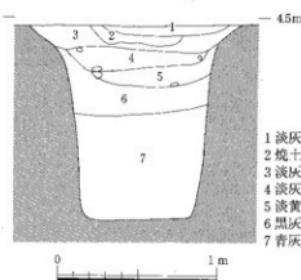
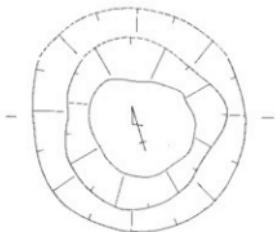


図69 井戸 7

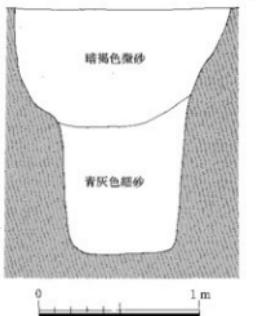
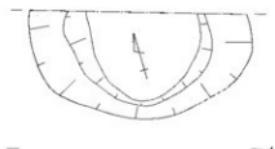


図70 井戸 9

P 68 (図73、74)

平面形は長軸約40cm、短軸約30cmで橢円形を呈する。刀子が出土した。

建物 1 (図75)

4区で検出した掘立柱建物である。近世の溝や水田暗渠などにより削平を受けており、北西部は調査区外に出る。そのため全容は判然としない。

遺物は柱穴の掘り方から土師質土器の細片が出土したのみである。

建物 2 (図76)

5区の北端で検出された掘立柱建物で北西側の調査区外に広がるものと推察される。柱穴の掘り方からは亀山焼と土師質土器の細片が出土した。

建物 3 (図77)

8区で検出された建物跡である。検出面は4.5m付近で、北西部が調査区外に出るほか、さらに南北両方へ広がる可能性がある。柱穴のひとつが井戸 8 を切る。

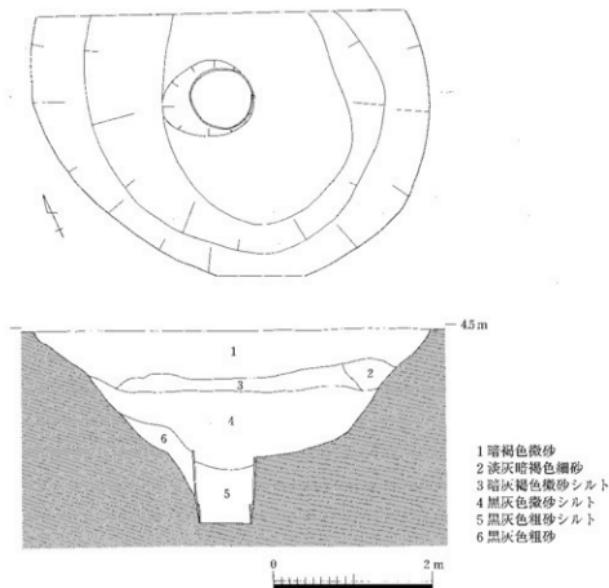


図71 井戸 8

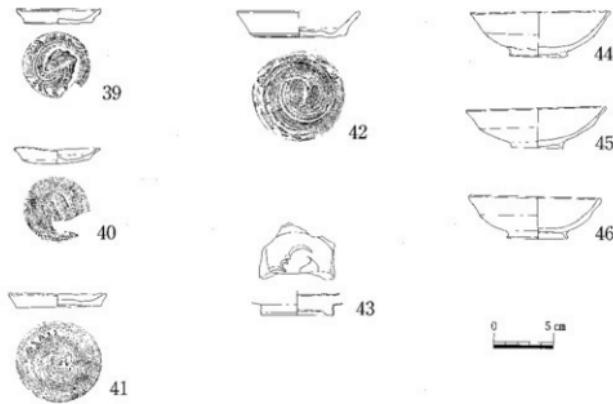


図72 井戸 8 出土遺物

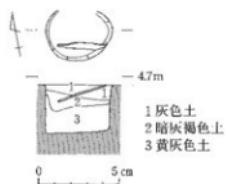


図73 P 68

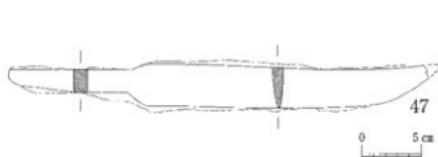


図74 P 68出土遺物

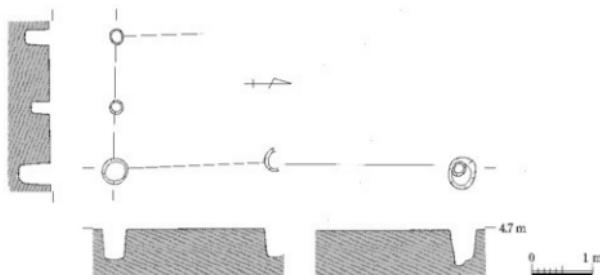


図75 建物1

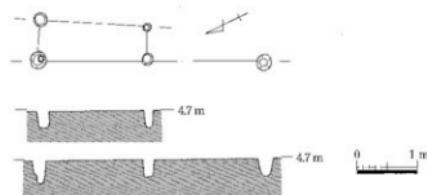


図76 建物2

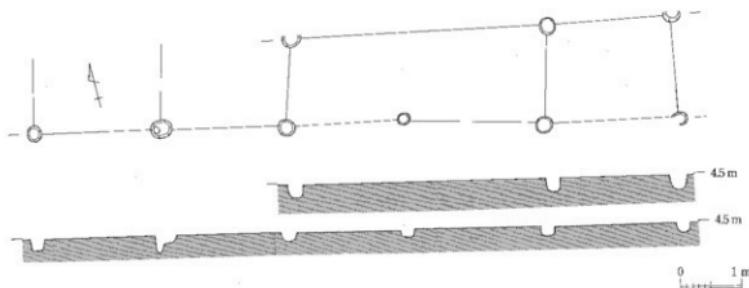


図77 建物3

溝3（図78）

幅約80cm、検出面からの深さ15から20cmで北側は調査区外に出る。時期は江戸時代中後期と推定される。

土坑墓1（図79）

平面形は長軸1.6m程度の梢円形か隅丸方形と推定されるが、大半が調査区外に出るため全形は不明である。検出面からの深さ約45cmで断面形は逆台形を呈する。底部に20cm程度の角礫が並びその内側から人骨が検出された。

井戸6（図80）

平面形は長軸2m、短軸1.6mの梢円形を呈する。検出面からの深さは約1.4mを測る。

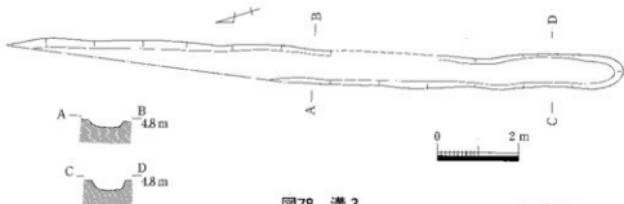


図78 溝3

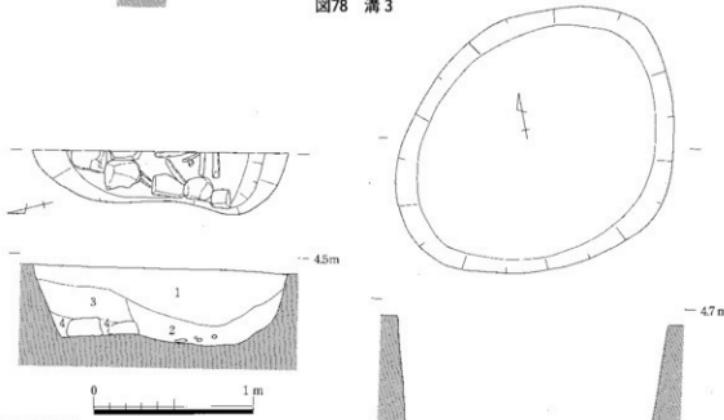


図79 土壙墓1

- 1 淡褐色白色微砂
- 2 淡褐色灰色微砂
- 3 明灰褐色細砂
- 4 淡黄灰褐色細砂

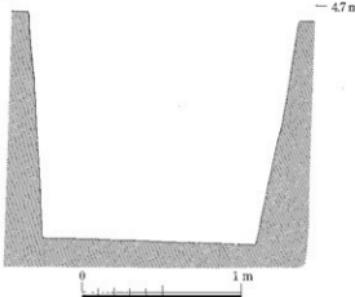


図80 井戸6

土器觀察票

同號 番号	遺構名	種類	器種	法 量 (cm)		色 調	胎 土	燒土	形 様・手 法 の 特 黴 な ど
				口徑	底径				
1	上坑 2	弥生土器	甌	35.2	-	褐褐色	含長石、石英	良好	外觀タケハケ下平ヘラミガキ。内面ハケメ後ナダ
2	牛坑 3	弥生土器	甌	10.2	4.6	19.2	黃褐色	含長石、石英	良好
3	牛坑 3	弥生土器	甌	13.0	-	淡赤褐色	含長石、石英	良好	外觀ヘラケズリ後ナダ。内面ヘラケズリ
4	土坑 3	弥生土器	甌	16.4	-	赤褐色	含長石、石英	良好	外觀ヘラミガキ後ナダ。内面ヘラケズリ
5	上坑 3	弥生土器	甌	14.6	-	淡褐色	含長石、石英、角閃石	良好	外觀タケハケ。内面ヨカナデ
6	牛坑 3	弥生土器	甌	-	-	淡褐色	含長石、石英、角閃石	良好	外觀ハケメ。内面ヘラケズリ
7	土坑 3	弥生土器	甌	14.3	5.0	8.5	青褐色	含長石、石英	良好
8	土坑 3	弥生土器	高坏	19.5	-	褐色	緻密	良好	外觀ヘラミガキ。ナダ。内面ヘラミガキ後ナダ
9	土坑 5	弥生土器	甌	15.8	6.7	29.1	褐海色	含長石、石英	良好
10	土坑 5	弥生土器	甌	32.2	-	褐色	含長石、石英	良好	外觀タケハケ。内面ヘラケズリ
11	土坑 5	弥生土器	甌	18.5	-	淡黃褐色	含長石、石英、角閃石	良好	外觀タケハケ下平ヘラミガキ。内面タケハケ後ヘラミガキ
12	土坑 5	弥生土器	甌	20.7	-	褐色	含長石	良好	外觀タケハケ。下平ヘラミガキ。内面タケハケ後ヘラミガキ
13	上坑 9	弥生土器	甌	11.9	-	淡褐褐色	含長石、石英	良好	外觀タケハケ。下平ヘラミガキ。内面ヨコヨミガキ
15	上坑 11	弥生土器	甌	17.7	-	青褐色	含長石、石英	良好	外觀タケハケ。内面ヨコヨミガキ後ナダ
16	上坑 11	弥生土器	甌	15.8	-	淡褐褐色	含長石	良好	外觀タケハケ。下平ヘラミガキ。内面タケハケ後ヨコヨミガキ
17	土坑 11	弥生土器	甌	20.7	6.6	21.4	褐色	含長石、石英	良好
18	土坑 11	弥生土器	甌	24.5	-	淡褐色	含長石	良好	外觀タケハケ。内面ヨコヨミガキ後ナダ
19	土坑 11	弥生土器	甌	-	8.4	淡褐褐色	含長石	良好	外觀タケハケ。タテミガキ。内面ナナメハケ後ナダ
20	牛坑 16	弥生土器	甌	24.4	-	白灰褐色	含長石、石英	良好	外觀タケハケ。下平タテミガキ。内面ナナメハケ後ナダ
22	土坑 22	弥生土器	甌	17.1	-	赤褐色	含長石、石英	良好	外觀タケハケ。内面ヨコヨミガキ後ナダ
23	溝 11	弥生土器	甌	13.5	-	淡褐褐色	含長石	良好	外觀タケハケ。内面ヨコヨミガキ
24	溝 11	弥生土器	甌	21.4	-	淡褐褐色	含長石、石英	良好	外觀タケハケ。内面ヨコハケ
25	土坑 7	「縄器」	甌	10.9	-	6.7	淡灰黃褐色	含長石、石英	良好
26	豊穴住 4	土器群	甌	13.2	-	18.0	青褐色	含長石、石英	良好
27	豊穴住 4	土器群	甌	9.35	-	9.4	青褐色	含長石、石英	良好
28	豊穴住 4	土器群	甌	19.8	-	-	青褐色	含長石、石英	良好
29	豊穴住 4	土器群	高坏	17.1	-	-	淡褐褐色	含長石、石英	良好
30	豊穴住 4	土器群	高坏	22.0	-	-	淡褐褐色	含長石、石英	良好
31	豊穴住 4	土器群	高坏	15.0	9.8	11.4	淡灰褐色	含長石、石英	良好
32	溝 10	陶器	甌	-	-	-	紫褐色	含長石、石英	良好
33	溝 4	陶器	脛体	34.8	-	-	淡褐褐色	含長石、石英	良好
34	溝 4	陶器	脣	-	3.5	-	灰白色	含長石	良好
35	溝 8	陶器	甌	-	11.7	-	赤褐色	含長石	良好
36	溝 8	瓦質土器	火钵	-	-	-	墨灰色	含長石	良好
38	溝 8	陶器	輪付甌	12.3	6.4	2.4	灰白色	繖突	良好
39	井戸 8	土器質	甌	6.9	6.7	1.7	白灰褐色	含長石、石英	良好
40	井戸 8	土器質	甌	7.0	5.5	1.4	淡褐褐色	含長石、石英	良好
41	井戸 8	土器質	甌	8.0	7.1	1.2	淡褐褐色	含長石	良好
42	井戸 8	土器質	甌	8.0	7.8	1.3	淡褐褐色	含長石	良好
43	井戸 8	青磁	甌	-	5.9	-	淡綠灰褐色	緻密	良好
44	井戸 8	土器質	甌	11.4	4.3	3.9	淡灰褐色	含長石	良好
45	井戸 8	土器質	甌	11.4	4.5	3.4	淡灰黃褐色	含長石	良好
46	井戸 8	土器質	甌	10.7	4.6	3.5	淡灰黃褐色	含長石、石英	良好

石器・石製品

掲載 番号	遺構名	種別	材質	法量(cm)			備	考
				長さ	幅	厚さ		
13	土坑5	石包丁	サスカイト	18.1	6.2	2.7	珪酸岩	
21	土坑20	石斧	ひん岩	(13.3)	7.5	5.2	刃部欠損	
37	廣8	石臼	花崗岩	-	-	12.6		

金属器

掲載 番号	遺構名	種別	材質	法量(cm)			備	考
				長さ	幅	厚さ		
47	P 68	刀子	鉄	35.2	3.4	0.9		

第 V 章　まとめと展望

まとめ

備中高松城は今回の調査の結果、戦国時代の城郭遺構をはじめ、弥生時代、古墳時代、そして城郭として利用されていた時期をはさんで中世から近世までの集落遺跡であることが確認された。遺構の形成が確認できない時期もあるものの、この地は安定した微高地であり各時期を通じて集落の一角を占めるものと推察される。

今回の調査は広大な城郭域のうちの1,200m²という限定された面積で、それも細長いトレンチで城郭の一端をかすめるというものであったが、謎の多い備中高松城と城郭が形成された微高地上の遺跡の性格の一端を知る上で貴重な調査となつたと思われる。

ここでは、各時期の遺構と遺物について簡単にまとめてみたい。

1 弥生時代

4区、5区、6区の各調査区で弥生時代の遺構と遺物が確認された。時期は中期から後期におよぶが、全体として遺物量が少ないながらも主体となるのは中期のいわゆる南方式から蓮池式にかけての時期である⁽¹⁾。6区の溝11は南北方向の溝であるが、この溝を境に東側では弥生時代の遺構は検出されていない。

後期の遺構は減少する傾向にあり、土坑2基と竪穴住居2軒などが確認されたのみである。

2 古墳時代

古墳時代の遺構は土坑2基と竪穴住居1軒を検出したのみである。いずれも古墳時代前期に属するものである。

3 奈良時代

今回の調査では当該期の明確な遺構は確認できなかった。しかしながら、2区の西端部と5区の南西端部の包含層から奈良時代頃と推定される須恵器片を採集した。

4 中世

中世の遺構は柱穴、溝、井戸などが確認されたが柱穴の多くが遺物を伴わないので明確な時期の判定が困難である。中世の遺構のうち最も古い段階に形成されたのは井戸8と推定される。この遺構は中国製青磁とともに土師質の椀、皿などが出土した。このうち椀の特徴から14世紀代に比定されるものと推察され⁽²⁾、築城以前の中世集落に伴うものである。またこれ以外にも5基の井戸が確認された。

溝8は城郭の外周に掘られた堀であると推定される。開削された年代は不明であるが、近世初頭に埋め戻されたものと推察される。溝9についても同様に近世初頭に埋め戻された堀と推定される。また、7区の溝17については遺物は検出されなかったものの、旧河道を利用した堀の跡である可能性が想定される。

1区、2区、3区では溝田もしくは湿地状の堆積が確認され、これらが高松城を閉む天然の要害を形成していたものと推察される。

5 近世

高松城は水攻めによる開城後は、岡山城主宇喜多氏の部将である花房正成をはじめ宇喜多氏の部将が城主となり江戸時代初頭には徳川氏の旗本となった花房職之が在城し、各城主によって改修が行われていたことが、本丸周辺部分の調査で明らかになっている⁽³⁾。職之は慶長末頃から元和初年頃に陣屋を本丸から原古才に移転したものと推定されており、三の丸には花房氏の菩提寺である妙玄寺と宇喜多直家の菩提を弔う星友寺が現存する。土壙墓1はこれらの寺院に付随する墓と推察される。また、溝3と井戸6についても同様である。

- (1) 鎌木義昌「各地域の弥生・土器・中国」「日本考古学講座」第4巻 1955年
- 出宮徳尚・神谷正義「南方（国立病院）遺跡調査報告書」岡山市教育委員会 1981年
- (2) 山本悦世「古備南部地域における古代末～中世の上層階の展開」「中近世時の基礎研究」Ⅴ 1992年
- (3) 出宮徳尚・根木修「備中高松城跡公園発掘調査概報」岡山市教育委員会・岡山市遺跡調査団 1976年

展望

高松城はこれまで、秀吉による奇策、水攻めとそのさなかに発生した本能寺の変、そして主家に忠誠を尽くし、城兵の生命と引き替えに自刃した城主清水宗治の美談という側面で語られることが多かった。また、それらの多くがいわゆる戦記物の記述に基づくものであり、多分に誇張の含まれたものであったと推測される。

その一つが、籠城の人数であり、また、秀吉によって築かれた築堤の規模についてである。近年に至るまで、特に築堤の規模については旧来の説が多く引用されているのが管見される。今日まで高松城の水攻めを検討する際、多く参考とされてきたものは『日本城郭史』があげられる⁽¹⁾。この中で水没範囲とされている地域は、標高10m前後のところまでが含まれている。これは築堤の高さを四間とする説をとったためであるが、以後この数値が多く引用されることとなる。また、その一方で、最近になって特に地理学の分野から、高松城と水攻めについての再検討が試みられるようになってきており、その成果も注目される。⁽²⁾

以下では、今回の調査の成果を踏まえ、未確定な部分も多いものの、城郭城の復原とその景観について若干の検討を試みることとする。

高松城では今回の調査を含めて2回調査がおこなわれた。一回目は1975年に実施された本丸周辺部における公園整備に伴うもので、本丸周辺部で花房氏の入城以降と推定される土段基部の捨石などが確認された。⁽³⁾また、今回の調査にひき続き築堤跡の確認調査が行われ、築堤の基底部幅などが明らかになった。

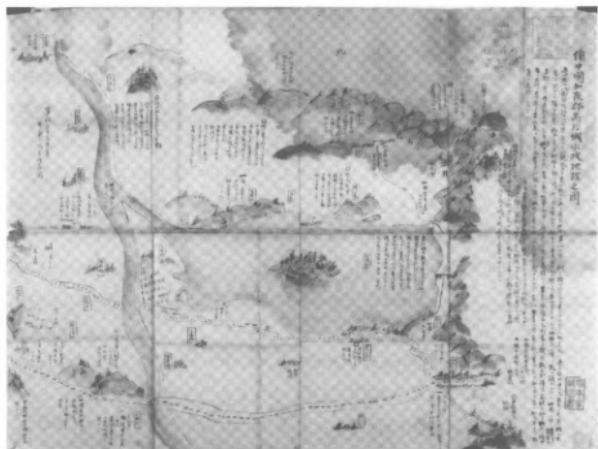
今回の調査で明らかになった三の丸の標高は約4.6から4.7mである。これは廃城後に耕地化される際に、削平されたものと考えられ、本来は5m前後であったと推察される。また本丸は現在は標高約6m前後を測るが、これは花房期の改修によるものと推定され、水攻め当時は現状よりも若干低かつ



図81 高松城図 高田馬治氏原図



図82 推定城郭域



古川古松軒「備中国加夜郡高松城水攻地理之図」

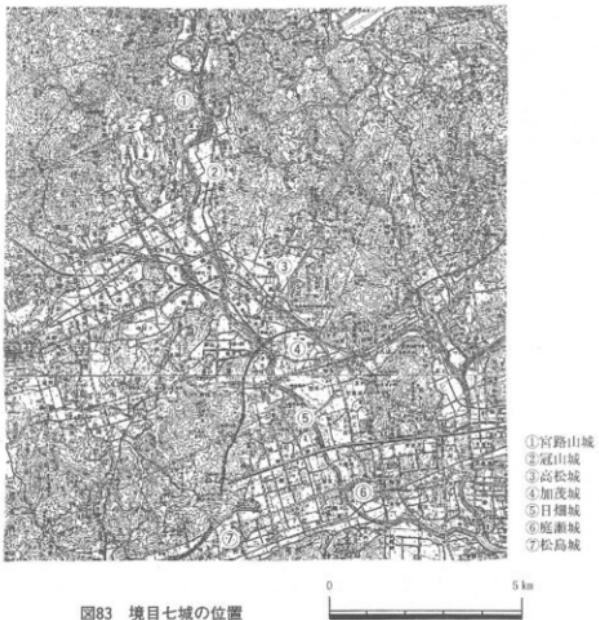


図83 境目七城の位置

たものと推察される。以上のことから水攻め当時の本丸から三の丸にかけての標高は、およそ5m前後であったと推察される。

また、城郭の範囲については高田馬治氏の詳細な検討がある⁽⁴⁾。(図81) 高田氏の作成した図を検討しつつ今回の調査をふまえ作成したのが図82である。広大な城郭域の僅少な部分の調査のみで、未確定な部分を多く残すものの、新たに三の丸と家中屋敷曲輪を画する堀の存在を想定したものである。

今回の調査は城郭の南端部を確認するにとどまったが、城郭の北半部については今後の調査に期待したい。また城郭の周囲の低地部を人為的に掘り下げられたものとする伝承もあるが、今回の調査ではその確証は得られなかった。

秀吉によって築かれた築堤は講和後すぐに取り崩されたとみられ、一部は明治期まで残っていたものもあったと伝えられる。太閤記の記述が広く一般に広まるのに従い、水攻めの実態はより不明確になつていったものと推察される。

そのような中にあって、江戸時代の地理学者である古川古松軒が作成した「備中国加夜郡高松城水攻地理之図」は水攻めの実態をかなり忠実に描写しているものと推察される⁽⁵⁾。この図によれば築堤は蛙ヶ鼻から原古才付近に重点的に築かれ、それより西は松山往来を活用して築堤されたことがよく伺われる。

また1985年6月にこの地を襲った洪水の情景を記録した林信男氏の写真がある。この写真によれば、本丸から三の丸にかけては水面上に出てるもの、家中屋敷曲輪と推定される部分については水没している状況が伺われる。この状況は築堤が存在しない場合においてもこの地域が洪水の影響を受けやすい場所であることを示すとともに、水攻め時の情景を反映しているものと推察される。

- (1) 大類伸・鳥羽正雄『日本城郭史』雄山閣 1936年
- (2) 鶴瀬良明「備中高松城水攻堤への異論」「城郭史研究」19号 1999年
- (3) 出宮健尚・根本修「備中高松城跡公園発掘調査概報」岡山市教育委員会・岡山市遺跡調査団 1976年
- (4) 高田馬治『高松城の水攻』1965年
- (5) 池田晶一「江戸時代の地理学者古川古松軒と備中高松城水攻め」
林 信男「備中高松城水攻めの検証」所収 1999年

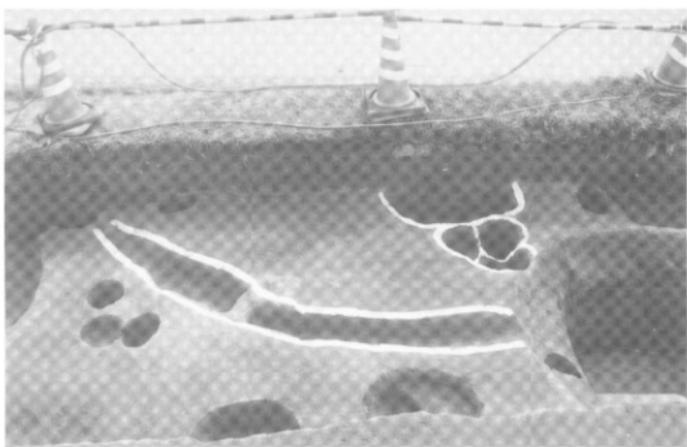
また、池田氏は調査中たびたび現地へおいでになり、いろいろご教示を賜った。



1985年6月25日の洪水 林信男氏提供



竪穴住居 1



竪穴住居 3



土坑31、26



6 区



土坑 9、14



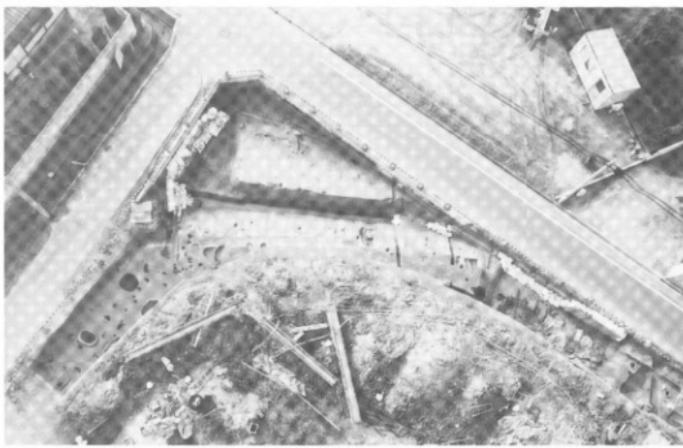
竪穴住居 4



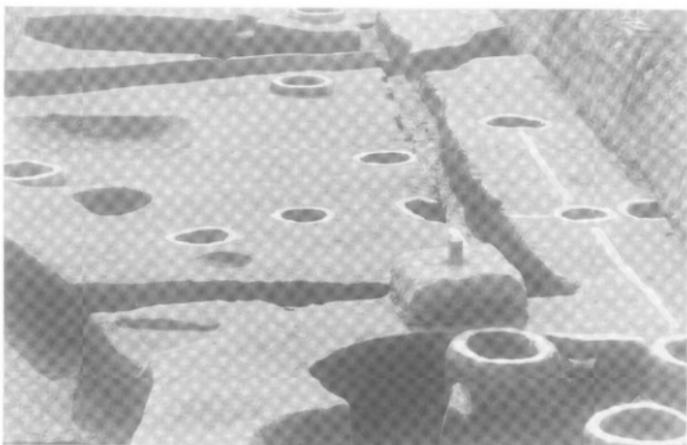
溝 8



溝 9



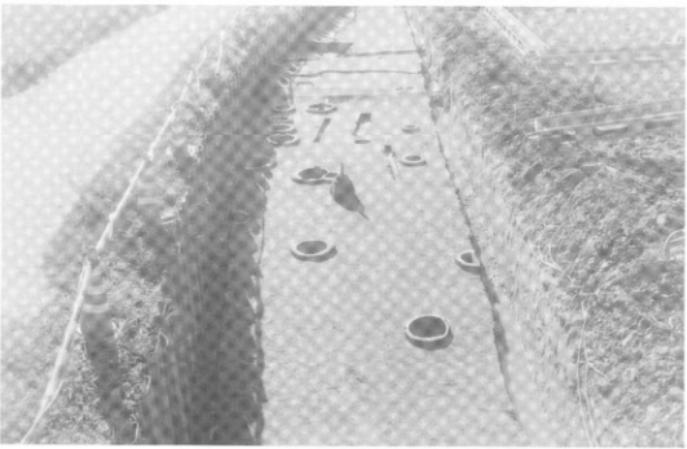
5 区空撮
堀家純一氏
提供



建物 2



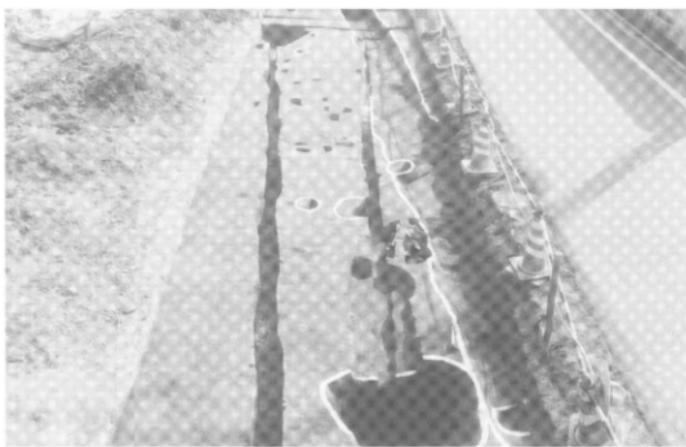
7 区、8 区
(後方、秀吉
陣地跡)



2 区



7区
溝15、16、17



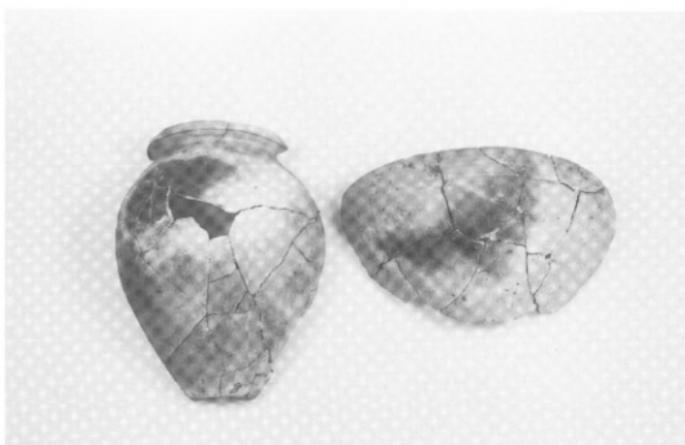
溝3
井戸1



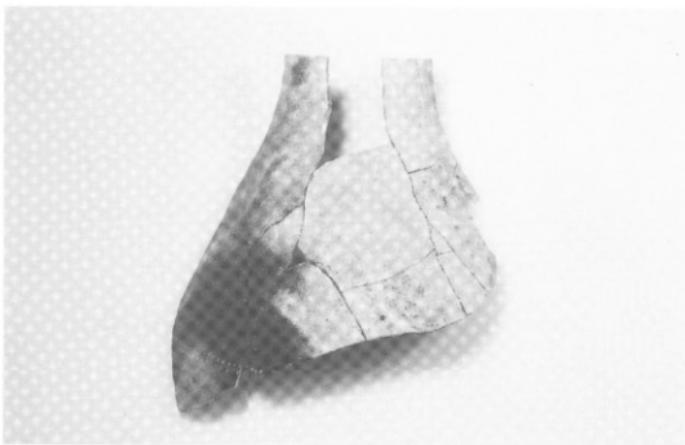
土壙墓1



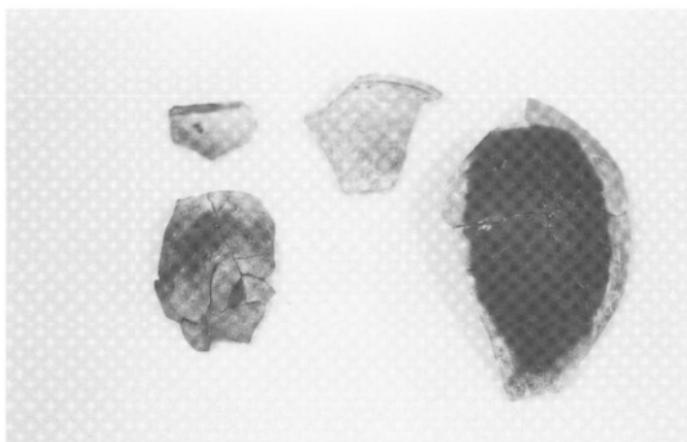
土坑 3
出土遺物



土坑 5
出土遺物



土坑 9
出土遺物



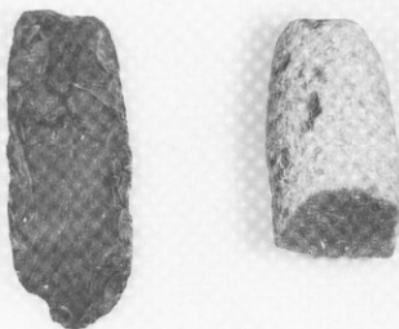
土坑11
出土遺物



土坑11
出土遺物



土坑15
出土遺物



土坑 5
土坑 20
出土石器



满 11
出土遗物



土坑 7
出土遗物



竪穴住居4
出土遺物



竪穴住居4
出土遺物



溝4
出土遺物



溝8
出土遺物



井戸8
出土遺物



P 68
出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	びっちょうたかまつじょうさんのみるあと						
書名	備中高松城三の丸跡発掘調査概報						
副書名	市道高松14号線道路改良工事に伴う発掘調査						
編著者名	高橋伸二						
編集・発行機関	岡山市教育委員会文化課						
所在地	〒700-8544 岡山市大供1-1-1 tel 086-225-4211						
発行年月日	西暦 2000年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
びっちょうたかまつじょう 備中高松城 さんのまるあと 三の丸跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 たかまつ 高松	33201		34度 41分 20秒	133度 49分 30秒	1997.6.9 1998.3.31	1,200 市道高松14号 線道路改良工 事に伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
備中高松城 三の丸跡	生活址 城館址	弥生 古墳 中期 近世	住居 建物 土坑 溝堀	各時期の 土器 陶磁器 石器			

備中高松城三の丸跡発掘調査概報

平成12年3月31日発行

発行・編集 岡山市教育委員会文化課

発 行 岡山市教育委員会

岡山市大供1-1-1

印 刷 株印刷工房フジワラ